

## 吉沢家寄贈「野澤如洋作品」の紹介

對馬恵美子<sup>1)</sup>

Emiko Tsushima : About Yoshizawas donation "Suibokuga of Nozawa Jyoyoo"

はじめに

平成23年9月、千葉県に在住の吉沢春恵氏より野澤如洋<sup>※1</sup>作品75点を青森県立郷土館に寄贈いただいた。春恵氏が当館への寄贈を決意した理由は、当館が同年春に開催していた企画展「戸倉嘉明コレクション寄贈記念 野澤如洋展」（平成23年4月22日から5月16日まで開催）を観覧されて、春恵氏の父、吉沢幸次郎が所蔵していた如洋作品を如洋の出身県でもある当館へ収めたいと思われたという。

吉沢氏からの寄贈の申込を受けて、同年6月に千葉県にある春恵氏のご自宅及び春恵氏の御子息のご自宅に伺い所蔵されている如洋作品の調査を行った。その際に、春恵氏から父・幸次郎とその師であった如洋に関することや、幸次郎の波乱に富んだ人生についてもお聞きすることができた。幸次郎は青森県出身者であり、明治期にアメリカに渡り苦学の末にカルフォルニアの大学院を卒業するなど、興味深い人生を送られた方であった。如洋の弟子は比較的少なく、幸次郎氏は如洋の最後の弟子と思われることから、参考までに春恵氏が書かれた手記及びお聞きしたことをもとに、幸次郎氏についても次ぎに簡単に紹介する。

野澤如洋は本県を代表する日本画家のひとりであることから、当館では昭和53年度に「野澤如洋展 郷土の生んだ不世出の画人」、平成6年度に「野澤如洋と橋本雪蕉展」、平成23年度には先に述べた企画展と、過去3回にわたり如洋の作品を紹介してきた。また、平成22年には戸倉家より代表作のひとつ「春の海、秋の海」を含む多くの作品が寄贈された。さらに他にも寄贈作品が数点あり、これらと今回吉沢家より寄贈された作品をあわせると、当館では充実した内容と点数を収蔵することとなった。戸倉家のコレクションについては、企画展の図録で既に紹介していることから、当稿では吉沢家寄贈作品について紹介し、今後の如洋作品活用の一助としたい。

吉沢幸次郎（仙洋）について

・吉沢幸次郎の生い立ちについて

吉沢幸次郎は、明治12年4月29日、青森県弘前市寺町の生まれ（昭和26年10月19日に逝去）である。明治31年に大学への進学を希望したが、家が貧しく学資を得ることが困難なため、親戚の勧めもあって19歳で渡米した。会話については、幸次郎の話し言葉は津軽弁の訛りがあり、日本人同士でも通じにくく、また渡米後も日本で学んだ英語が全く役に立たずかなり苦労されたという。アメリカではハイスクールの4年に編入し、英語の勉強を一から始めたという。19年の歳月をかけてカルフォルニア大学の大学院を卒業した。専攻は電気であった。アメリカでは自分の生活費、食費、学費を書生として現地の大金持ちの家で働き、夏休みは農家でアルバイトをしながら自分の力でまかなう一方で、日本の実家へも毎月送金をかかさなかった。当時ドルと円との差が大きかったので、なんとかできたという。幸次郎の話によると、当時日本から来ていた学生もかなりいて、皆、アメリカの進んだ学問を学び、日本もそれに追いつき、立派な国にしたいという希望に満ちた生活をしていたという。日本人の学生らは集まれば、国家を論じ、天下を論じ、日本の将来を案じていたという。

さてカルフォルニア大学の電気科の大学院に在籍中、かの著名な科学者、エジソンが大学を訪れて、学生に講義をしたことがあったという。電気を学ぶ学生にとって、エジソンは神のような存在であった。学生たちは質問を受けてもらえるということで、それぞれ大きな期待を持って集まり、難しい電気の法則や、発明の過程を尋ねる学生がいて熱気に溢れていたという。そんな中、生徒会長である幸次郎の発言に注目が集まったが、彼は「先生は神を信じられますか？」と質問したという。電気の事とは無関係なこの質問に、一瞬会場は静かになり、緊張がはした。エジソンはしばらく間を置き「自分は一生懸命化学をしてきた。しかし、科学において解明出来ないものがあることを知った。それを神と思う。」と述べたという。

帰国してからは、ウエスチングハウスというアメリカ系の会社に勤務していたが、同会社が日本を撤退、一年間の失業の後で、語学力をかわれ、スエーデン系の会社に勤務する。私生活では女医であったサワ氏と結婚し、二人の女の子に恵まれる。その次女が、吉沢春恵氏である。（家族写真掲載）

1) 青森県立郷土館 副館長（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

## 仙洋と如洋

幸次郎は、小学校4年の時の担任が彼の描いた絵をたいそう褒めてくれたのがきっかけで、絵を描くことがとても好きになり、それ以来、常に絵筆を持ち続けていたという。渡米中においても苦しい生活の中にもありながらも油絵を描き、帰国してからは日本画（南画）に転向し、閩秀画家暗香※2という作家に師事した。暗香から「私はもう教えられないから」と言われ、野澤如洋を紹介されたという。如洋は弟子をとることに消極的であったので、最初幸次郎の申し出を受け付けなかったが、幸次郎は一旦この人と思えば、テコでも動かない性格であったので、雨が降ろうが槍がふるうが、如洋が居る居ないにかかわらず、毎週土曜日の午後一時に必ず如洋の家に通い続けた。これにはさすがの如洋も根負けし、「土曜の午後は吉沢が来るから」と、その時間帯は必ず家において彼を迎えるようになり、如洋から、「如洋」の「洋」の一字をとった雅号「仙洋」をもらい受けた。「仙」の文字は如洋の師・三上仙年の雅号の一字、さらに仙年の師・平尾魯仙の一字、また如洋の最初の雅号は「仙蘭」と、重みのある一文字である。

如洋の教え方は、如洋がまず手本を描き、仙洋（幸次郎）がそれを自宅に持ち帰り、次ぎの週の土曜日まで手本をみながら幾枚も描き、その中から一番良いと思うもの数点を選び、土曜日にそれを持参して如洋から教示を受け、また如洋から手本を描いてもらうという、その繰り返しであったという。

春恵氏の記憶にも、幸次郎が赤い毛氈を敷き、片折の画仙紙を広げて、一気に描き上げる様子を見ながら、大きな硯で姉と二人で墨をすった思い出が残っているという。幸次郎が自身で納得のいった作品には、仙洋の落款（署名と印）をしたためたという。

## 終わりに

今回の春恵氏の寄贈により、如洋の最後の弟子と思われる吉沢仙洋の存在を知ることができた。これは、如洋の研究にとって、貴重な情報となるであろう。如洋の門人には中村旭洋、竹森巢鴨、須藤聖馬らが知られているが、仙洋に関しては若くして渡米し帰国後も千葉県に住んでいたことから、本県では知られることなく現在にいたってしまったものと思われる。

最後に、今回の調査にあたり、吉沢春恵氏、そのご長男の吉沢俊政氏、その妻の吉沢陽子氏から多大なご協力を賜った。深く感謝したい。

## ※1 野澤如洋

野澤如洋は元治2（1865）年、青森県弘前に生まれ、平尾魯仙の高弟と言われた三上仙年に師事。明治26年から主に京都及び東京を創作の拠点として日本画を制作し、明治期の国の主催する展覧会に数多く入選した。如洋は水墨画の発祥の地である中国に5年間渡り、研究を深め、その後、西欧やアメリカなどを周遊し、画業を深めた。昭和5年に東京に移り住んでいることから、仙洋が弟子入りしたのは昭和5年以降から亡くなる昭和12年までの間のことと思われる。

如洋は活動の地を県外に移した後でも、頻繁に帰郷し、如洋の出身地弘前を中心に揮毫し、多くの作品を残した。如洋の豪快で、潔い画は、当時の文化人をはじめ多くの人達を魅了し、今でも、津軽を中心に根強いファンが多くいる。

## ※2 兼重暗香（かねしげ あんこう）

明治5（1872）年～昭和21（1946）年。山口県山口市。

本名兼重梅子。5歳の時歩行の自由を失うが、手押し車で通学し、画を学ぶ。野外写生が困難なため、南画に転向し、野口小蘗（弘化4～大正6大坂生まれ。明治期を代表する女性南画家のひとり）に師事した。1902年（明治35）年日本美術院展に出品したのをかわきりに文展、帝展に出品し、入選を重ねた。1930年（昭和5）日本美術協会幹事となり、小蘗没後は同協会の中心となった。香風会主催。74歳没。

（参考資料 1994年11月11日 JWA 日本美術と女性 『日本美術を支えた女性画家たち』）



写真 前列右より春恵氏の母、春恵氏、春恵氏の姉、後列幸次郎



2207-01



2207-02



2207-03



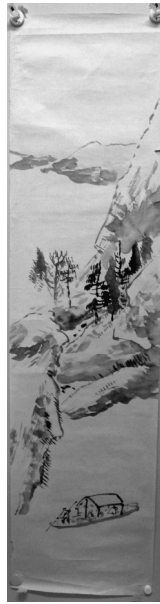
2207-04



2207-05



2207-06



2207-07



2207-08



2207-09



2207-10



2207-11



2207-12



2207-13



2207-14



2207-15



2207-16



2207-17



2207-18



2207-19



2207-20



2207-21



2207-22



2207-23



2207-24



2207-25



2207-26



2207-27



2207-28



2207-29



2207-30



2207-31



2207-32



2207-33



2207-34



2207-35



2207-36



2207-37



2207-38



2207-39



2207-40



2207-41



2207-42



2207-43



2207-44



2207-45



2207-46



2207-47



2207-48



2207-49



2207-50



2207-51



2207-52



2207-53



2207-54



2207-55



2207-56



2207-57



2207-58



2207-59



2207-60



2207-61



2207-62



2207-63



2207-64



2207-65



2207-66



2207-67



2207-68



2207-69



2207-70



2207-71



2207-72



2207-73



2207-74



2207-75

## 寄贈作品一覧

受番号	作家	作品名	技法	寸法	形態
2207	— 1	野澤如洋	山水 墨画	138.0×33.4	まくり
2207	— 2	野澤如洋	山水 墨画	141.6×35.0	まくり
2207	— 3	野澤如洋	山水 墨画	140.0×35.0	まくり
2207	— 4	野澤如洋	山水 墨画	137.4×32.0	まくり
2207	— 5	野澤如洋	山水 墨画	134.4×34.4	まくり
2207	— 6	野澤如洋	米点山水 墨画	135.6×33.4	まくり
2207	— 7	野澤如洋	山水 墨画	134.4×34.0	まくり
2207	— 8	野澤如洋	山水 墨画	136.0×33.4	まくり
2207	— 9	野澤如洋	山水 墨画	136.4×33.2	まくり
2207	— 10	野澤如洋	山水 墨画	138.0×33.4	まくり
2207	— 11	野澤如洋	山水 墨画淡彩	137.0×33.6	まくり
2207	— 12	野澤如洋	竹図 墨画	137.0×33.4	まくり
2207	— 13	野澤如洋	山水 墨画	144.0×35.4	まくり
2207	— 14	野澤如洋	山水 墨画	140.2×35.2	まくり
2207	— 15	野澤如洋	山水 墨画	141.0×34.8	まくり
2207	— 16	野澤如洋	山水 墨画	136.8×33.6	まくり
2207	— 17	野澤如洋	山水 墨画	137.4×33.2	まくり
2207	— 18	野澤如洋	山水 墨画	134.4×34.0	まくり
2207	— 19	野澤如洋	山水 墨画	138.0×33.8	まくり
2207	— 20	野澤如洋	山水 墨画	140.6×35.4	まくり
2207	— 21	野澤如洋	竹図 墨画	141.0×35.4	まくり
2207	— 22	野澤如洋	竹図 墨画	139.6×34.0	まくり
2207	— 23	野澤如洋	桜に鶯 墨画	141.0×34.6	まくり
2207	— 24	野澤如洋	竹図 墨画	139.0×35.0	まくり
2207	— 25	野澤如洋	竹図 墨画	138.4×33.0	まくり
2207	— 26	野澤如洋	山水 墨画	139.6×35.0	まくり
2207	— 27	野澤如洋	山水 墨画	135.0×34.8	まくり
2207	— 28	野澤如洋	竹図 墨画	136.6×33.6	まくり
2207	— 29	野澤如洋	竹図 墨画	134.2×34.8	まくり
2207	— 30	野澤如洋	竹図 墨画	140.6×35.0	まくり
2207	— 31	野澤如洋	山水 墨画淡彩	134.4×34.0	まくり
2207	— 32	野澤如洋	竹図 墨画	139.4×34.8	まくり
2207	— 33	野澤如洋	竹図 墨画	139.6×35.0	まくり
2207	— 34	野澤如洋	竹図 墨画	139.0×34.6	まくり
2207	— 35	野澤如洋	米点山水 墨画	137.0×34.0	まくり
2207	— 36	野澤如洋	米点山水 墨画	138.6×33.8	まくり
2207	— 37	野澤如洋	山水 墨画	138.2×33.9	まくり
2207	— 38	野澤如洋	竹図 墨画	140.0×35.2	まくり
2207	— 39	野澤如洋	竹図 墨画	138.0×34.6	まくり
2207	— 40	野澤如洋	竹図 墨画	137.6×33.6	まくり
2207	— 41	野澤如洋	山水 墨画	137.0×33.8	まくり
2207	— 42	野澤如洋	竹図 墨画	134.4×34.8	まくり
2207	— 43	野澤如洋	竹図 墨画	139.0×33.2	まくり
2207	— 44	野澤如洋	竹図 墨画	140.0×34.8	まくり
2207	— 45	野澤如洋	竹図 墨画	134.0×34.6	まくり
2207	— 46	野澤如洋	竹図 墨画	138.4×34.8	まくり
2207	— 47	野澤如洋	竹図 墨画	140.0×34.4	まくり
2207	— 48	野澤如洋	竹図 墨画	139.0×33.6	まくり
2207	— 49	野澤如洋	竹図 墨画	135.4×33.6	まくり

受番号	作家	作品名	技法	寸法	形態
2207	— 50	野澤如洋	竹図 墨画	139.0×35.0	まくり
2207	— 51	野澤如洋	竹図 墨画	139.8×34.8	まくり
2207	— 52	野澤如洋	竹図 墨画	139.2×34.8	まくり
2207	— 53	野澤如洋	竹図 墨画	139.2×35.0	まくり
2207	— 54	野澤如洋	竹図 墨画	140.4×34.8	まくり
2207	— 55	野澤如洋	竹図 墨画	138.4×33.7	まくり
2207	— 56	野澤如洋	竹図 墨画	142.0×34.8	まくり
2207	— 57	野澤如洋	竹図 墨画	138.4×33.8	まくり
2207	— 58	野澤如洋	竹図 墨画	138.8×33.2	まくり
2207	— 59	野澤如洋	竹図 墨画	138.2×34.0	まくり
2207	— 60	野澤如洋	竹図 墨画	129.0×33.8	まくり
2207	— 61	野澤如洋	竹図 墨画	140.8×34.6	まくり
2207	— 62	野澤如洋	竹図 墨画	140.0×34.4	まくり
2207	— 63	野澤如洋	竹図 墨画	140.0×34.8	まくり
2207	— 64	野澤如洋	竹図 墨画	140.4×34.8	まくり
2207	— 65	野澤如洋	竹図 墨画	140.0×35.0	まくり
2207	— 66	野澤如洋	竹図 墨画	137.0×34.4	まくり
2207	— 67	野澤如洋	竹図 墨画	137.0×34.6	まくり
2207	— 68	野澤如洋	竹図 墨画	140.0×34.8	まくり
2207	— 69	野澤如洋	芦 墨画	140.0×34.2	まくり
2207	— 70	野澤如洋	竹図 墨画	135.8×34.0	まくり
2207	— 71	野澤如洋	竹図 墨画	136.6×34.8	まくり
2207	— 72	野澤如洋	竹図 墨画	134.5×34.6	まくり
2207	— 73	野澤如洋	竹図 墨画	134.4×34.2	まくり
2207	— 74	野澤如洋	竹図 墨画	137.2×34.4	まくり
2207	— 75	野澤如洋	竹図 墨画	138.4×34.6	まくり

2207-12のみ落款あり



2207-12の部分拡大